

## 序

また永井教授の御指導をいただいた。熱砂の上を這いまわりながら、これも専門の範囲、などおっしゃっては下さるが、何ともはや恐縮である。御多忙にかかわらず此の冊子のために御文章まで給わった。衷心より御礼を言上する次第である。教授と共に調査に御参加下さった田中良之・木下尚子の両氏からも学生たちが様々な御教示をいただいた。

今回は出来事が多かった。出発した途端に県南の局地豪雨のため八代で立往生した。往きは勢いと云うものがあるが、出鼻をくじかれた引き返しの何と惨めだったらしいこと——。装備が何倍も重くなって大学まで運べず、一時預けにした代金が約1万！往復ビンタを喰ったみたいで頭に来たりした。

復旧して再出発したが、名瀬到着の直前、7月15日午前5時すぎ、甲元助教授の御母堂の赴報に接した。実は御不例と聞いて無理に残留して貰ったのだが、それほどの御重態とは思っていなかった。仰天して留守居の学生達と電報を打ち会ったりした。此の頃、再度の集中豪雨で熊本方面の電話の回線がおかしくなっていたのである。夜、テレビを覗くと水害のニュースばかりで、熊本県が水没したような印象を受けたものだ。自宅を案じた学生も居たことであろう。

遺跡はいずれも小さく、しかも破壊を受けていた。実習発掘としては手頃の規模であって、しかも気が楽であったはずだ。反面、荒された遺跡特有の難解さに手こずらされたようだ。発掘調査は、判らないからこそ切り開いてみる、と云う一面を持つものだ。科学的な決断を必要とするものであることを忘れないよう。

甲元助教授は御葬儀の後、直ちに現場に来会された。此の冊子は実習報告書であるから当然ながらひどく拙なくて、薄っぺらで貧相だが、とにかく学生達の手造りに成るものである。御母堂の御霊前に捧げさせていただきたく思う。

最後になったが、例によって現地の皆様の御世話になったので、御礼申しあげたい。特に、完成して開館を待つばかりの郷土資料館に起居させていただいたことは学生達一同にとって忘れ難いところであろう。

1983年3月31日

白木原 和美

# 例 言

- 本書は1982年7月15日～27日に発掘調査を行った、大島郡笠利町所在のケジ遺跡・コピロ遺跡・辺留窪遺跡の調査報告である。
- 本書の編集には主として米倉秀紀が当り、執筆者は各文末に記名して示した。
- 調査参加者は下記のとおりである。

## 考古班

白木原和美、甲元眞之、中山清美、本田京子、米倉秀紀、西谷 大、池田伸二、内山省吾、馬原和広、蒲原 卓、古賀 朗、坂口隆裕、末本八珠美、谷本浩澄、松原明美、明瀬慎吾、茂山宏美、井上信之、岡本直久、神宮美保、平 俊隆、友口恵子、林田奈生子、藤崎伸子、三山 茂、吉武牧子、吉永義治

## 人類班

永井昌文、田中良之、木下尚子

# 本 文 目 次

笠利半島の位置と環境及び先史遺跡の分布	1
ケジ遺跡	4
一、位置、現状、調査	4
二、層序と遺構	4
三、出土遺物	7
四、ま と め	11
付説 砂丘性小遺跡について	11
コピロ遺跡	19
一、位置、現状、調査	19
二、層 序	19
三、遺構・人骨所見	23
四、出土遺物	28
五、ま と め	31
辺留窪遺跡	32
一、位置、現状、調査	32
二、層序と遺構	34
三、出土遺物	34
四、ま と め	42